

谷田部論稿「場合の数・確率の「苦手」についての数学的分析」について

「場合の数」「確率」を苦手とするものが、学習者の中に(ときは教育者の中にも)多く存在する理由を、そもそもの問題提示の表現に含まれる表現の曖昧さ、そしてその曖昧さに気付かぬ教員側の体質に分け入ってみようとした意欲的な論考である。「 n 個の異なるもの」から「 r 個を取り出して」「並べる」「順列」という導入的な説明文に潜む、数学的に不正確 (inexact)、哲学的には不十分 (あるいは不完全 inadequate) が見過ごされているという指摘は、少しでも思索的に「場合の数」「確率」に取り組んだことのある人にとって「まさにそう!」と賛同される面も多いと思うが、他方、わが国で一般化している、受動的な問題解決術の習得をもって実力がついたと思っている多くの人には、話が高尚すぎて、問題の核心に迫っていないという感想も出て来そうかと危惧する。言い替得れば、本論考の著者が、「場合の数」「確率」について、現在一般化している現行の教科書、参考書の類で「曖昧化」/「誤魔化」されている記述を

数学的に《厳密化》、哲学的に《十全化》すべきである

というのか、あるいは

《厳密》でも《十全》でもない単元であるから廃止すべきである

というのか、それとも、これら両者の過激な立場を避けるために

小学校算数と同じレベルと覚悟して、小学生をなだめ癒てるように教えるべきである

というのか、読者は戸惑うのではないだろうか。おそらく、著者の立場はそれらのいずれでもなく、3つの立場を、良くいえば、「調和」させて、悪くいえば「妥協点」を見出しながらやって良くということになるのかも知れないが、論文としては、鮮明なメッセージを主張するものであって欲しかった。

PH-7